したが、力つきて天下の名城『鶴ヶ城』も、ついに西軍の手に明け渡すこととなってしまいました。柴五郎の一家は、母たち女性がみな自害して果ててしまったのに、父佐多蔵をはじめ、四人の男兄弟が生き残る結果となりました。

開城後、城内に生き残った会津藩士たちは猪苗代へ、城外にあったものは塩川などに移され、とらわれの身となってしまいました。その後、さらに越後高田や東京その他に護送されて、「謹慎所」といわれるところに押し込められ、監視されることになりました。

五郎の一家は東京に移されましたが、五郎は長兄太一郎と一緒であり、父と五三郎、四郎の三人はそれぞれ別の場所に移されてしまいました。

それから一年近く五郎は右も左もわからない東京で、書生・下男・馬丁などをして、小僧よばわりされながらよその家を転々として働くよりほかはありませんでした。